

新・第5話「グラウンドの扉」

その部屋は、誰かに監視されているような、重苦しい気配に満ちていた。
窓もなく、壁には誰かの視線が張りついている。

私は、その気配に耐えながら、ただじっとしていた。

だが、ある瞬間、何かが起きた。

背後に誰かの気配を感じた。

振り向く前に、私は悟った。

―襲われるかもしれない。

嫌だ。

絶対に嫌だ。

からだが凍りつきそうになる。

でも私は、心の中で叫んだ。

「ここだけは、壊されてはならない」

自分の内奥にある、最後の砦のような場所。

私は、その境界を必死に守ろうとした。

次の瞬間、なぜかドアが見えた。

部屋の隅に、それまで気づかなかった扉。

私は、そこに向かって歩いた。

手が震える。

足がもつれる。

でも、歩いた。

ドアノブを握る。

冷たい金属が、私の決意を試すようだった。

ぐっと力を入れて回すと、ギィ…という音とともに、扉が開いた。

その先には、誰もいないグラウンドが広がっていた。

整備もされておらず、草がまばらに伸び、空は曇っていた。

風が少しだけ吹いていた。

私はそこに立った。

もう、あの部屋には戻らない。

風が、私の決断を確かめるように、そっと髪を揺らした。
私は、自分の足で、グラウンドの真ん中へと歩き出した。